

# Y A

2006  
No.  
23



これは世につたえておきたい  
かたっておきたい  
わが胸の底から真実のおもい  
人生幾山河のめぐりあい  
あの日の風やひかり そして空のひとひら  
哀歓のかがり火に生きた幾年月の路  
「自分史図書館」は その証言館です。



### 私の稀観本ノート その23

○松永伍一著『子守唄の人生』

椎窓 猛

去る10月の一燈大学で、KBC九州朝日放送の元ディレクター山田龍蹊さんを講師に迎えた。演題は「記憶が遺す昭和の記録」山田さんが直接取材し、ドキュメンタリー制作に当たった体験だけに胸を打ってくる話題で感銘を受けた。なかでも、「詩人松永伍一の子守唄紀行＝“天草の老人ホーム”からゆきさん」の話は、印象鮮烈であった。「七つで子守、十八で出稼ぎ、磯辺の千鳥のように泣きながら海を渡った娘たち……」山田さんは松永伍一さんが書いた中公新書『子守唄の人生』は絶版だと話していた。

しかし私はこの一冊を所蔵していたと思い、書棚を探索したところ出てきた。昭和52年の発行（1977）であるから29年前になる。もはや絶

ねんねんころころ  
夕日の紅さ  
お空の雲も浄土ゆき  
ゆつくりゆつくり漕いでゆく  
ねんねんころころ 母さんひとり  
もうじき彼岸がやってくる  
そこから浄土にはいります  
ねんねんころころ お舟にのって

版古本の類に当るものか。

もし、山田さんの講演にめぐりあわなかったら、松永さんのこの一冊をとりだして再読していたか、どうか。

「私は若いとき、シベリアに行つて、三十四、五までおったでしょうかな」ロシア語も覚えているという天草の大山ツイノさんの話など、新たな感動に包まれた。

（自分史図書館長）

矢部川 吉武千里（筑後市）  
私の矢部川  
子供の頃からの私を知っている川  
今も時折、川べりに来てやりきれない思いを  
呟く  
そんな私の胸の中のものもややを  
全てのみこんでゆつたりと流れる  
いつもありがとう  
そして、これからもよろしく

「ありがとう」は感謝のことはば  
いちばん大切なのは、私たちの心を  
温かくしてくれた「ありがとう」  
○世界一短い感謝状をRKB毎日  
放送が募集したものです。  
筑後市の吉武さんは、自然、川への  
感謝状。



○塔に魅せられて  
山際得悦

献本に添えられた山際さんのお便りー「さて、インターネットで、貴図書館のことを知り、ここに拙著を献本させていただく次第です。小生は仏教文化が好きで、仏像から入り、石仏に惹かれ、更に建物に興味の中心が移りました。対象は五重塔、多層塔、処女出版は平成5年「関東篇」8年「東日本篇」平成11年「中部日本篇」平成16年「近畿・岡山篇」これを献本させていただくことに致しました。」

山際さんは、千葉県我孫子市在住。東急コミュニティーお勤めのかたわらの大労作で感銘深く拝読した。



蔵書目録③ができました ¥80 円80 (郵便切手可)

**自分史図書館**

入館無料  
開館 午前9時～午後5時  
閲覧希望の方は予め電話でご確認下さい。  
貸し出しはしていません。

〒833-0032 筑後市野町423-8  
TEL・FAX 0942-53-8122  
西鉄バス野町停留所より徒歩5分  
インターネットでもご覧になれます。http://www.jibunshitosyokan

受贈図書紹介は今月休みます。



紅葉 奥田和子

こんな苦しいのに  
窓辺で木々は  
宴を飲んでいる  
ワインを飲んでいる  
いや 吟醸酒かもしれない  
色づいて 青い空



句集 千里を翔けて  
中村姫路

はぐれ鴨見てをりわれもひとりなる  
秋の夜のまだ話したき受話器置く  
神さびて十一月の杉の針  
残月や淡海きらきら冬に入る  
落し文手に置き遠路物語  
寒々と波寒々とかもめ啼く  
上州の風がはしゃぐよ桑解かれ



○館長漫調  
貞森比呂志

貞森比呂志氏は佐賀市の文化会館の館長さん。館案内誌に毎月連載されたエッセイを集録されたもので、干潮満潮の差日本一大きい有明海にちなむ標題。

「一円玉の旅がらす」で館長さんは、バット一振り何万円になるプロ野球選手。献金名目で労せず金を手にする政治家。「ピンからキリまで」目立たぬ仕事、下働きのコツコツとまじめな職業を一円玉のように軽んじる風潮。「一円だって一円だって、恋もしたけりゃ夢もあるー」館長さんは、「ぬくもりのある社会実現」を希求されている。



○四階の小さな踊り場  
山田敦心

山田さんは、かつて佐賀の俊秀新鋭と注目を集めた作家である。この作品集を手にして、その山田さんも早や70歳を越えられるかと感無量な思いであった。あとがきに「若い頃は小説書きになりたいとの気概もあったが、反面、会社勤めの気楽さ、安穩さに染って毒気を抜かれ、ぬるま湯に浸り……」と述べられているがこの集成は、一つの青春文学記念の道標として貴重である。通常の図書館では、おそらく価値はさして考えられないかも知れないが、わが自分史図書館にとっては貴重な一冊である。巻頭の「事故」は、高見順氏や平野謙氏が文学時評で好意ある評価を寄せた作品。

編集掌記

▼この「自分史図書館」の存在を、インターネットで知ったと、寄贈して戴く方が多くなってきた。遠くは関東、千葉、東京、関西、そしてお隣の熊本、佐賀、思いがけない献本に感動すること再三である。このような書物は特別「YA」に紹介しておきたいと考えている。通常の図書館ではお目にかかれない図書館としての特色を発揮するよ

うに努めたいのである。▼筑後、八女一帯での文化活動、生涯学習活動として、「八媛ふるさと一燈大学」四年目、人生史サークル会誌『黄櫨』の刊行も十年目。それぞれに多彩な展開をみせている。「黄櫨」については麻生原知事からの寄稿もあり、この持続力には関心を寄せられている。このような活動に対して市町村教育行政の担当の方々はどのように見られているものかと、ときに思わぬでもない。図書館公民館などで購読されても悪いことではないと考えるが如何でしょうか。